

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬萊むしの会
第23号 2026.2.10

私の虫採り物語 (5) 杉峠とヒサマツミドリシジミ

小松 清弘

鞍馬街道も鞍馬温泉を過ぎると人家がなくなり、急勾配のくねくねとした山道が続きやがて花背峠に達する。峠の手前を右に曲がり林道を登り切ったところに小さな峠がある。峠には数本の杉の巨木が立っている。

この小さな峠こそチョウマニアの聖地として一世を風靡した「杉峠」である。初夏の午後、峠の杉の梢に小さなチョウがやってきてテリトリーを張る。このチョウこそ当時の蝶マニアの垂涎の的だったヒサマツミドリシジミである。

戦後、日本のチョウの生活史は驚くほどの速さで解明されていったがヒサマツミドリシジミは謎のままに確実に採集できる場所は数か所が知られるのみであった。その一つが杉峠だった。シーズンになると5mを超える長竿（1960年代当時はそれ位が限界だった）が何本も杉の周りに立ってチョウの飛来を待ち構えていた。でも、竿の届くところまで下りてくることは少なく採集できた者は少なかった。

私が杉峠に行ったのは中学生の時だった。時期としては少し遅い7月の中旬だった（その頃は7月上旬が適期であったが、最近は温暖化のせいかわりに6月中、下旬がベストらしい）。朝のバスに乗り花背峠で降りて峠に急ぐ。峠に着くともうすでに数人の採集者が場所取りをしていた。

私は飛来時間まではその先の大見尾根に行って、ほかのゼフなどを採集して峠に戻った。峠には結構な人数が集まり思い思いの場所でネットを構えていた。その中には入ったものの到底採れるとは思えなかつた杉の梢を眺めるだけだった。結局、その日は飛来がなくすごすごと最終のバスで帰った。

次に杉峠に行ったのは高校に入ってからだった。その頃にはヒサマツミドリシジミの生活史も解明され、食樹のウラジロガシからの採卵による飼育で多くの標本が得られるようになっていた。そのためか成虫の採集は下火になっていた。高校生になっていたのだから雑誌などからの情報で杉峠のヒサマツミドリシジミの採集法もわかったし、竿も改良されたものが手に入ったので採れるかもという期待を持って出かけた。

数人の採集者が集まっていた杉峠をスルーして大見尾根へと進んだ。ヒサマツミドリシジミは杉峠の杉以外にも大見尾根のところどころにポイントがあるということで探しながら進んで行った。ポイントは林の中にできた空間や林道沿いの斜面にある空間ということで、それらしく思われるところを見つけると空間の周辺をたたいて飛び立たないか見ていった。

大見へ下る坂まで行って引返した。行くときに見ておいたところをゆっくりと見ながら戻る。道の斜面の駆け上がるようになった空間のポイントを見た時だった。空間の中央にある低い木の枝でテリトリーを張っているゼフを見つけた。枝から飛び立ってまた元の枝に戻ることを繰り返していた。きらきらと緑色が輝くのが目に入った。早速竿をつないで

斜面を上った（その頃は継ぎ竿が主流だった）。枝に止まっていた個体が急に飛び立ったので慌ててネットを振ったが焦っていて振り逃がす。でも幸運にも横の木の枝に止まってくれた。今度は慎重にネットを被せる。道に降りてからネットの中を見ると確かに入っている。さらによく見るとまさしくヒサマツミドリシジミのオスだった。慌てるなど自分に言い聞かせながら慎重に胸を押して三角紙に収める。ふーっと大きく息をするとやっと採れたという安堵と満足感がわいてきた。

それ以来、毎年杉峠に足を運んだ。大見尾根のところどころで毎回少しずつ採集することができた。途中で雷雨に会い土砂降りの中、金属を体から遠ざけて体を低くして屈んでいたことや帰りのバスに乗り遅れて峠道を下る途中で親切なトラックの運転手に拾ってもらったこと、教員試験の勉強をしながら飛来を待ったことなど思い出もたくさんある。

ただ、ヒサマツミドリシジミの採卵、飼育を始めると杉峠にはほとんど行くこともなくなった。科学センターにいる頃やアキアカネの調査に行った時など数回だけだった。

ところがここ数年また行きだした。放蝶会の後に上田君が行こうと誘ってくれるようになったからである。久しぶりに行った杉峠や大見尾根の変わり様は大変なもので昔の面影は全くと言ってなかった。それでもヒサマツミドリシジミはまだいた。杉や広葉樹の梢でテリトリーを張っている個体を見ることができた。上田君が仕留めたし、昨年の放蝶会の後に行った時には上田君の長竿を借りて久しぶりに採ることもできた（図1）。



図1 大見尾根のヒサマツミドリシジミ♂

今年は、昨年、上田君が採った石川県の医王山に行ってみたいし、まだ成虫を採ったことのないメスを狙って城之崎の来日岳にも行きたいと考えている。

大原 いのちの季（とき）

如月

フユイチゴ

暦の上では春ですが、大原はまだまだ冬です。寒々とした林縁の日陰に緑の葉を広げたつる植物を見つけました。緑の葉の間に真っ赤な実をつけたフユイチゴです。1 cmほどの実には数個の粒が集まっています。

フユイチゴは千葉県より南の本州、四国、九州に見られるキイチゴの仲間です。地面を這うように伸びていきます。葉は円形で浅く3～5に裂けています。初秋に葉のわきから花柄を伸ばし先に白い花を咲かせます。

冬になると実が真っ赤に熟します。実は食用になります。少し酸っぱくほのかに甘みがあります。ビタミンCが豊富で生食するほかにたくさん集めてジャムやジュースを作ることができます。



（文 小松清弘 写真 的場亮一）

山田池公園の蛾たち

～トイレ廻りでモス・ワッチング～

村上 豊

はじめに

健康維持のため1日6000歩のウォーキングを自分に課してから約2年が経過しました。それ以前もよく歩く方でしたが、歩数のカウントはしていませんでした。一念発起したのだったか、あるいは何かきっかけがあったか、よくは覚えていませんが、ノルマを課して専用のスマホアプリを使い始めると、目的地に着くことだけでなくその過程、歩くことそのものに意味が加わりました。歩数や消費カロリーと自分の健康状態との関連が次第に分かってきます。これは良い、継続できそうだと実感できた頃、どうせ歩くなら楽しく歩ける道を、車が行き交う道やショッピングモールの売り場より、木陰が涼しく鳥が鳴き、虫たちが花を訪れているようなところがいい、そんな道をしっかり歩こう、と思うようになりました。

山田池公園は私の住む大阪府枚方市にあります。今や私の行きつけの10あまりのウォーキングエリアのうちで、最も近くてよく行くところです。そして行けば何か「エエもん」が観られる山田池公園が気に入っています。今回はこの山田池公園ウォーキングでの副産物、2025年の1年間に撮りためた蛾の画像のうち40点をご覧に入りたいと思います。

山田池公園あれこれ

山田池公園は枚方市のほぼ中央付近、旧国道1号線に隣接する73.7ヘクタール（甲子園球場の19倍）の緑地帯です。池そのものの歴史は古く、灌漑用としておよそ千二百年前に築造されたとのこと。その役を終えた後、周囲の農地とともに都市公園として整備が進められ、昭和54年（1979年）に府立公園として開園したようです（山田池公園HP）。

公園全体は概ね平行四辺形で、北西から南東に横切る「市道杉渚線」によって北地区と南地区に大別されています（図1）。はじめに整備され開園したのは北地区で、10ヘクタールの水域面積をもつ山田池全体を包み込む、樹林帯が主体のエリアです。所々に花木園、花しょうぶ園、もみじ谷などの見所が配置されています。また山田池を取り囲むように、春日山・東山・津之木山といった山名が見えますが、いずれも標高差が20m程度の膨らみで、分け入ると整備開園以前の森がよく残されています。大阪近郊によく見られるコナラ・クヌギやスダジイ・アラカシ・ヤブツバキなどからなる樹林に加え、管理道沿いには公園整備に際して植栽されたとみられるソメイヨシノやイロハモミジなど多くの樹木が並び、それらも大きく成長しています。遅れて整備され、平成16年（2004年）に開園した南地区は元々は広い竹藪を中心とする荒廃地だったと記憶しています。こちらは元の植生をほぼすっかり取り除いた後の丘陵地に芝を敷き、ポプラやフウなどの樹木をまばらに配置してあります。周囲はBBQで利用できるエリアになっていて、お決まりのソメイヨシノやウメの各品種、ユリノキなどが植栽されています。一角は棚田様の貸し農園になっていて、小規模ながらクヌギ林がその背後に控えています。

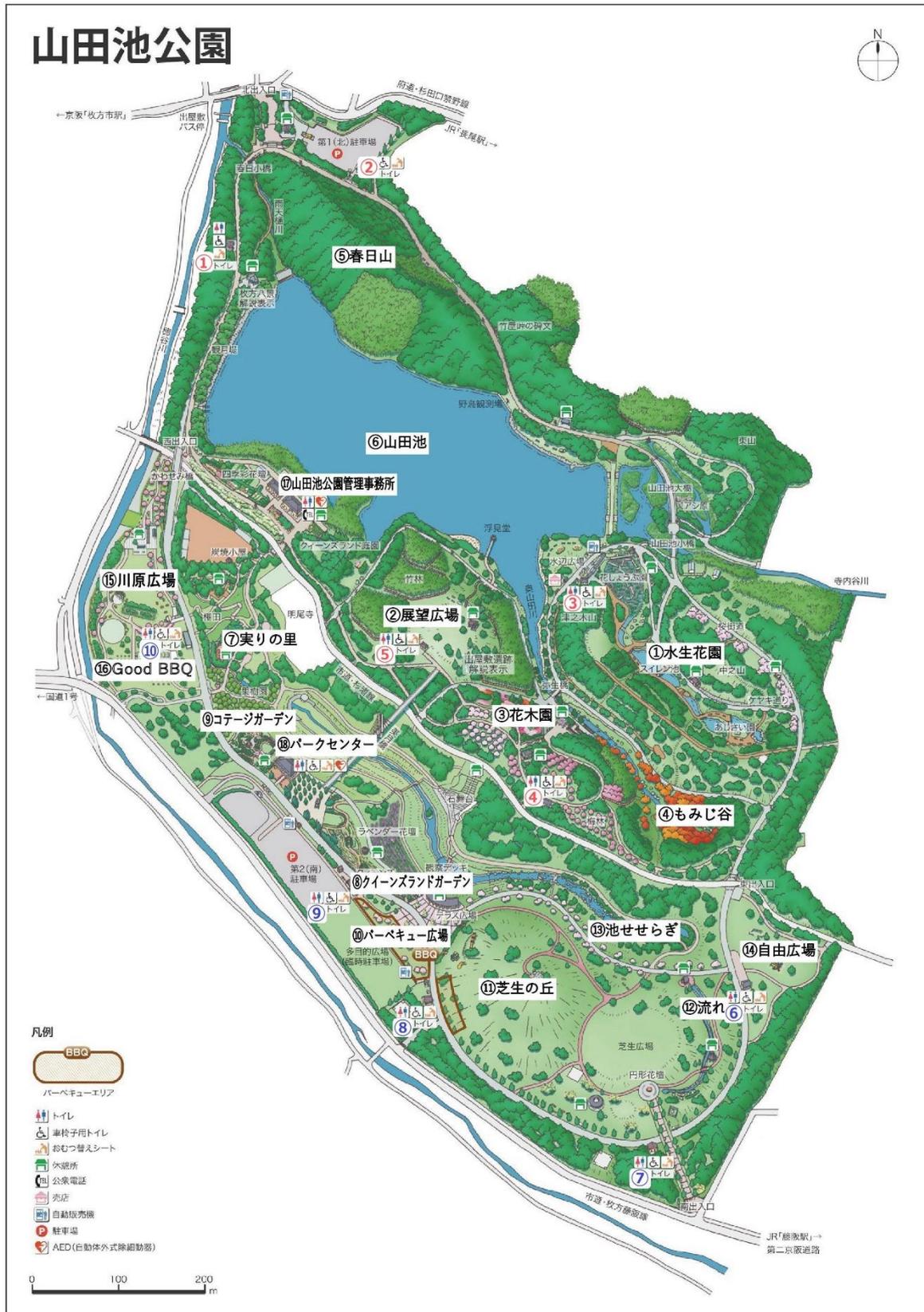


図 1 山田池公園 MAP

多様な人々がこの公園を利用します。若い夫婦は小さな子たちを遊ばせに、もう少し大きくなった子たちとはBBQを楽しみに来園されているようです。バードワッチャーの方々には毎回のように出会います。特に冬場は池の水鳥と樹林の梢に来る小鳥を狙うための、バズーカ様望遠レンズを携行されています。私同様、早朝からのウォーカーは相当の人数ですが、捕虫網を持っている人とは出会ったことがありません。園内に何通りもの周回コースがあり、ランナーたちがそれぞれの目標で頑張る姿もあります。魚釣りは禁止されていません（一部の場所を除き）が、そんなに釣れている様子はありません。ネコをキャットフードで手懐けようとする人、コイやカモにパンの耳を持ってくる人、特定外来種のヌートリアにこっそり何かしらを与えている人もよく見ます。梅園や並木の桜が満開になると、花見の人たちに混じってコスプレイヤーが現れることもあります。

この公園には北地区に5カ所（図1中の赤①～⑤）、南地区に5カ所（同青⑥～⑩）、計10カ所の公衆トイレが設置されています。

トイレの蛾

周知のように、多くの蛾は夜行性で光に集まる習性があります。蛾を集めるには、ライトトラップを仕掛ける、糖蜜を夜に撒く、あるいは特定の種を狙ってフェロモントラップを設置するなどの手法があります。大きな装置が必要だったり、準備に手間がかかったりでお手軽とは言えません。そこで私が注目したのが「トイレ廻り」です。トイレに集まる蛾を早朝のウォーキングのついでに観察して廻るのです。前記のように、山田池公園には10カ所の公衆トイレがあり、それを見て回れば蛾が観察できるうえに、ちょうどノルマの歩数をクリアすることが出来ます。蛾の方は沢山止まっている日と全く居ない日があり、また蛾がよく集まるトイレとほとんど居ないトイレがありますが、時々「いい蛾」が止まっていることがあり、ウォーキングの励みになっています。

なぜトイレに蛾が集まるか、その理由はいくつかあります。まず、山田池公園のように24時間オープンな公園ならトイレは夜通し点灯されていること。近年の灯りはほとんどがLEDになり、蛾が誘引される波長の光がほとんど出しておらず、昔に比べてずいぶん少なくなりましたがそれでも蛾は来ます。次の要因は、多くのトイレが白っぽい壁やタイル敷きになっていること。これは夜間わずかな光でも反射するので効果的です。またあの特有の匂いも無関係ではないと思います。そしてあとひとつ、建物が中途半端に開放的で、一度迷い込んだ蛾が出て行きにくい構造となっていることです。マニアックな昆虫採集法にマレーゼトラップ法というのがあります。これは障害物に行き当たった昆虫が、行き止まりまで進んで出られなくなった状態なのを採集するという装置ですが、公園のトイレはでっかいマレーゼトラップとして機能するのです。

ただ、トイレ観察には弱点もあります。朝陽が上がり、気温の上昇と共に蛾は飛び去ってしまったり、活性化した小鳥やトカゲなど小動物に捕食されてしまう（目撃したことはないですが）こともあるでしょう。またさらに時間が経過し9時を過ぎると、定期的に行われるトイレ掃除によって洗い流されてしまうこともあります。キレイなトイレは有り難いのですが、私は何度か残念な思いをしました。ともかく頑張って朝早く廻るのが基本です。また根本的なことですが、女性用のトイレにはさすがに踏み込めませんので、半分近くは泣く泣く見逃すこととなります。ただでさえ、トイレの周囲をスマホを構えて壁見て

歩く私は怪しいヤツに違いなく、通報されるようなことが無いように、特に注意していません。目的の蛾が便器の中に落ちていることも実はあります。その時は衛生上の問題が生じない程度に、ほどほどの距離を持って撮影するにとどめます。

山田池公園の蛾 40 選

一年間を通して蛾は発生します。イボタガや春キリガ類（ヤガ科のグループ）はギフチョウ同様春に一度だけ羽化します。地味すぎてスプリングエフェメラル（春の妖精）とは呼ばれませんけれど。人気のカトカラ類（〇〇シタバ）や美しいオオミズアオ、スズメガ科の多くは夏休みの頃に出現しますが、一番多くの種類が観られるのは梅雨の晴れ間じゃないかと思っています。ウスタビガは多くの蝶が姿を没する 11 月になってから新鮮な個体が出現するし、以降もフユシヤク類は厳冬期の 12 月～2 月に多くの種が姿を見せてくれます。（注；山田池公園ではまだ私はイボタガもオオミズアオも観ていません）

図 2 (p. 8) に示した 40 種の蛾は、2025 年の 1 月 14 日から 12 月 18 日までのほぼ一年間、山田池公園に通ってトイレの蛾を撮影したものの抜粋です。この間少なくとも 26 回の訪問記録がありますが、秋の一時期、特に 10 月など一度もトイレ廻りができませんでした。時間があればアサギマダラを追いかけていたためです。以下、図 2 の番号順に種名、学名と撮影月日を列記しました。サイズの小さい地味なものばかりですが、よく見ればキレイだったり格好よかったりしますし、都市公園での生き物の多様性を感じてもらえる材料になるかと思えます。

- ① ナミスジフユナミシヤク *Operophtera brunnea* 1 月 14 日
- ② チャバネフユエダシヤク *Erannis golda* 1 月 19 日
- ③ フサヒゲオビキリガ *Agrochola evelina* 1 月 19 日
- ④ シロオビフユシヤク *Alsophila japonensis* 1 月 24 日
- ⑤ ウスバフユシヤク *Inurois fletcheri* 2 月 5 日
- ⑥ クロテンフユシヤク *Inurois membranaria* 2 月 20 日
- ⑦ シモフリトゲエダシヤク *Phigalia sinuosaria* 2 月 20 日
- ⑧ シロフフユエダシヤク *Agriopis dira* 3 月 6 日
- ⑨ チャオビフユエダシヤク *Phigaliohybernia fulvinfula* 3 月 6 日
- ⑩ ホシオビキリガ *Conistra albipuncta* 3 月 6 日
- ⑪ カバナムシヤク の一種 *Eupithecia* sp. 4 月 17 日
- ⑫ フタナミトビヒメシヤク *Pylargosceles steganioides steganioides* 4 月 17 日
- ⑬ ウスキヒメシヤク *Idaea biselata* 5 月 16 日
- ⑭ ウスグロセニジモンアツバ *Paragona inchoata* 5 月 16 日
- ⑮ キバラヒメアオシヤク *Hemithea aestivaria* 5 月 30 日
- ⑯ カバイロトガリメイガ *Endotricha theonalis* 5 月 30 日
- ⑰ ヒメツバメアオシヤク *Maxates protrusa* 5 月 30 日
- ⑱ ヒメツマオビアツバ *Zanclognatha subgriselda* 5 月 30 日
- ⑲ キオビベニヒメシヤク *Idaea impexa impexa* 6 月 13 日
- ⑳ カギシロスジアオシヤク *Geometra dieckmanni* 7 月 1 日
- ㉑ ツマキシヤチホコ *Phalera assimilis* 8 月 5 日
- ㉒ オオマエキトビエダシヤク *Nothomiza oxygonioides* 8 月 12 日

- ②③ トサカフトメイガ *Locastra muscosalis* 9月3日
- ②④ ウスチャヤガ *Xestia dilatata* 11月4日
- ②⑤ ナミテンアツバ *Hypena strigatus minna* 11月4日
- ②⑥ オオトビモンシャチホコ *Phalerodonta manleyi manleyi* 11月30日
- ②⑦ チャエダシャク *Megabiston plumosaria* 11月30日
- ②⑧ ニトベエダシャク *Wilemania nitobei* 11月30日
- ②⑨ ミドリアキナミシャク *Epirrita viridipurpurescens* 12月4日
- ③⑩ アオアツバ *Hypena subcyanea* 12月8日
- ③⑪ カバエダシャク *Colotois pennaria ussuriensis* 12月8日
- ③⑫ クロスジフユエダシャク *Pachyerannis obliquaria* 12月8日
- ③⑬ テンスジキリガ *Conistra fletcheri* 12月8日
- ③⑭ ノコメトガリキリガ *Telorta divergens* 12月8日
- ③⑮ ヨスジノコメキリガ *Eupsilia quadrilinea* 12月8日
- ③⑯ クロオビフユナミシャク *Operophtera relegate* 12月12日
- ③⑰ ムラサキトガリバ *Epipsestis ornata* 12月12日
- ③⑱ キトガリキリガ *Telorta edentata* 12月14日
- ③⑲ ナカオビアキナミシャク *Nothoporia mediolineata* 12月14日
- ④⑰ キバラモクメキリガ *Xylena formosa* 12月18日

上記以外にもミツボシキリガとかスギタニキリガという渋いイイ蛾も確認しましたが、キリガ（キリガ？）無いので省略しました。ウオーキングもトイレ廻りも継続中です。

さいごに

「公衆トイレ」も「蛾」も一般には好まれることのない二者ですが、あえてそこへ踏み込んでみました。だからこそ面白さが隠れているように思います。蝶に比べて蛾の世界は地味で種類数が多く分かりにくいでしょう。私もかつて蝶に夢中だった頃、フィールドで飛んでいる鱗翅をみつけて「なんだ、蛾か」と馬鹿にしてきたのを今は勿体ないことをしたと後悔しています。もっと若い頃から蛾に目覚めていたら、種を同定する苦労は少なかつたろうと思います。今回の記事執筆に当たっての蛾の同定は、web上の【みんなで作る日本産蛾類図鑑 V2】をおおいに利用しましたが、一部は画像検索「google lens」のお世話になりました。この画像検索のおかげで目的への絞り込みが非常にスムーズになり重宝しました。しかしよく言われることですが、検索結果を丸呑みする危険性も感じました。このような種の同定での利用は、ある程度の基礎知識を持っていること、信頼できるサイトや書籍へフィードバックして確認するなど慎重に利用することが求められていると思います。

参考文献

- 日本産蛾類標準図鑑 I・II 岸田泰則編 2011 学研
- 日本の冬夜蛾 小林秀紀編 2016 むし社
- 日本の冬尺蛾 中嶋秀雄・小林秀紀著 2017 むし社
- みんなで作る日本産蛾類図鑑 V2 (ウェブサイト)



図2 トイレの蛾 40種

オオムラサキの越冬齢期についての記載の変遷

藤野 適宏

オオムラサキの越冬齢期について、日本産蝶類標準図鑑（学研、2006）に「正常の越冬幼虫は4齢（寒地）、5齢（暖地）」とある。大原のオオムラサキを守る会が2013年から開始した観察では4齢での越冬が確認できて、上記図鑑の表現に従えば、大原は“寒地”に当たるのであろうと妙に納得した。しかし現在は5齢越冬の可能性が出てきて、その確認のための調査を続けている。

4齢で越冬するのか、5齢で越冬するのかは観察を緻密に続ければわかることだが、日本産蝶類標準図鑑に書かれたことを我々が知るようになったのは、実は21世紀に入ってからのものである。以下に手持ちの図鑑等の記述の変遷を古いものから並べてみた。

- ① 「落葉の裏面に2齢で越冬する」（原色日本蝶類図鑑、保育社、1954）
- ② 「4齢（ときに3齢）幼虫は食樹の落葉前から、徐々に幹を伝って地面におり、落葉の下で越冬する」（原色日本昆虫生態図鑑Ⅲチョウ編、保育社、1972）
- ③ 「本種の幼虫は3令で越冬するものと、4令で越冬するものと、2通りあります（まれに5令越冬も考えられます）」（グリーンブックス15「オオムラサキの生態と飼育、ニュー・サイエンス社、1975」）
- ④ 「エノキ・エゾエノキなどの根もとの落ち葉の裏について3～4令の幼虫で冬をすごす」（ポケット科学図鑑2昆虫、学研、1980）
- ⑤ 「越冬幼虫は、あたたかい地方では4令と5令です。でも北国では4令にまじって、ふ化のおそかった幼虫のなかには、3令で越冬するものもあります」（科学のアルバム「オオムラサキ」、あかね書房、1983）
- ⑥ 「(写真の説明文)3齢幼虫 しばらくすると、木を下りて、落ち葉の下などで越冬します」（小学館の図鑑NEO昆虫、小学館、2002）
- ⑦ 「正常の越冬幼虫は4齢（寒地）、5齢（暖地）、3齢はいない。越冬後の齢数は必ず2齢」（日本産蝶類標準図鑑、学研、2006）
- ⑧ 「越冬幼虫の齢数には二つのパターンがある。すなわち、4齢幼虫で越冬するものと5齢幼虫で越冬するものとである。図鑑に時々、『オオムラサキは3齢または4齢幼虫で越冬する』と書かれたものがあるが、これは明らかに間違いである。自然状態では、一般的に関東以北のものは4齢、関西以西のものは5齢で越冬する」（オオムラサキ—日本の里山と国蝶の生活史、信濃毎日新聞社、2007）

⑦の日本産蝶類標準図鑑の「正常の越冬幼虫は4齢（寒地）、5齢（暖地）」に至るまで、①のように越冬齢が2齢と思われていた時があったのだ。①は私の小中学生時代のバイブルで、年玉を貯めて、貯めて、貯めて、貯めて買ったのを憶えている（定価850円）。そして、オオムラサキは2齢で越冬するものと信じて疑わなかった。図鑑などは普遍的に読まれるものだから、記載に当たっては慎重な観察実験が大事だと痛感する。

<1月おもな活動の報告>

◆1月14日(水) 10:00～ (報告者: 奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、的場、奥谷、計6名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容
 - ②雑誌「ゆずりは」のアサギマダラの記事の紹介
 - ③水尾のフジバカマ連作障害－戸寺のフジバカマと同様に肥料不足
戸寺と網室外のフジバカマに石灰と油粕を施肥する必要あり
 - ④網室内エノキ剪定と施肥が必要
 - ⑤今後の幼虫飼育－網室外のエノキに網掛けして飼育する
 - ⑥オオムラサキを守る会のホームページについて
 - ⑦的場さんの体調について
 - ⑧アサギマダラの会の金田さんの原稿をホームページに掲載することについて
- ・作業 網室外ブッドレアの剪定と処理および網室内エノキの剪定と枝の処理

◆1月28日(水) 10:00～ (報告者: 小松)

○参加者 藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、小松、計7名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容
 - ②藤野さんからの昨日の活動報告
網室エリアのアサギマダラの幼虫、文化センターでの活動と連絡
ドングリ園の剪定作業について (2/16 実施予定)、学校対応
オオムラサキの頭殻調査について
- ・作業 堆積場からの堆肥の取り出し、剪定枝の処理、網室内のエノキの剪定

【あとがき】1月21日に寒波がやって来て、強弱を付けながら10日間以上居座った。北海道や青森は記録的な大雪である。網室内の発泡スチロール箱に入れておいたオオムラサキの幼虫は、側面や天井にいたものが1頭もいなくなり、皆落ち葉の中に潜り込んだ。見事な対応だ(2月3日現在)。(藤野)

= 目 次 =

私の虫採り物語 (5) 杉峠とヒサマツミドリシジミ	1
大原 いのちの季 (とき) 如月 フユイチゴ	2
山田池公園の蛾たち～トイレ廻りでモス・ワッチング～	3
オオムラサキの越冬齢期についての記載の変遷	9
1月おもな活動の報告	10
あとがき・目次	10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会 2026年2月10日 第23号

H P 大原のオオムラサキを守る会 <https://ohara-omurasaki.com/>

大原のオオムラサキを守る会代表 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町54 小松清弘

蓬莱むしの会代表 〒520-0105 大津市下坂本1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原21-151 藤野適宏